

Madame Eglentyne は *The Prioress's Tale* の語り手としてふさわしいか

齋藤 勇

I

チョーサーの「女子修道院長の話」(*The Prioress's Tale*¹ [以下 *PrT* と略]) は優しい情緒の溢れた作品である。七才の幼児が上級生から教えられた聖母マリアの交誦 *Alma redemptoris mater* (救いぬしの聖なるおん母)² を学校の往き帰りに歌いつづけ、ユダヤ人の憎しみを買い、喉をかき切られて殺される話である。死してもなお *Alma* を歌いつづけるが、それは不思議な「種」(*greyn*) (VII, 665) を舌の上ののせてくださった優しい聖母マリアの功德によるものであった。犯人逮捕、^{ぼうだ} 滂沱たる万人の涙の中での葬式と魂の昇天。哀感誘引という点からすると十分に成功したた作品となっている。中世とはいってもこの時代は、もはや教会の信徒教導に際してのむき出しの教條的説得は後退し、むしろ恐怖、憐憫、想像といった日常生活の範囲内での具象的、感覚的な情緒的経験を媒介とした信徒教育というものが評価されてきた時代である。キリストの人間性、マリアの遍在性、その個々人への、特に弱い恵まれない個人への情緒的側隠と、それへの個人の内的反応。チョーサーのこの作品はそういう同時代の傾向をよく反映している。そして、ペーソスを誘引させるためにいろいろな工夫がこらされる。そのひとつはこれが殉教者 (*martyr*) の話といっても、幼児殉教者 (*child-martyr*) の話として提供されているからでもある。この話は「序章」(*Prologue*) と本話 (つまりクリスチャン少年の殺害) とに分かれていて、その「序章」の

冒頭にひとつの祈りがある。主の御名の讚美, 単に大人 (men of dignitee) (VII, 456) だけでなく「幼児の口からも」(...by the mouth of children) (VII, 457) その廣大無辺さが讃えられます云々といった祈りであるが、これが「詩篇」8章, 2節～3節 (Vulgate) や『ローマ教会典禮書』(*Missale Romanum*) の「罪なき聖嬰兒等殉教者の祝日」(The Feast of the Holy Innocents, Martyrs) (12月28日) のミサの入祭文のラテン語のパラフレイズであることは明らかである。「幼児の口から」('...by the mouth of children') のところは 'Ex ore infantium' の翻訳である。

語り手, 女子修道院長マダム・エグレンティーン (madame Egleyntyne) は七才の幼児の受難の話を語るに際してこの罪なき聖嬰兒 (The Holy Innocents) のことを意識している。'Ex ore infantium' という文言が、「罪なき」という概念を意識してさらにパラフレイズされている箇所があるからである。幼児の母親がわが子の行方を狂気のように探し求めて、ちょうどその殺害現場にさしかかった時、語り手の主への讚美「幼児の口からもその廣大無辺さが讃えられます云々」が再びあり、その時の「幼児の口から」が 'By mouth of innocentz' (VII, 608)³ となっている。その讚美に応えるかのごとく殺されて汚辱の穴に投げこまれた幼児の歌う Alma が朗々と (loude) と鳴りわたる (rynge) (VII, 613)。興味あるのはこの母親がその際「この第二のラケル」(This newe Rachel) (VII, 627) と呼ばれていることである。ここに再び語り手の聖嬰兒への意識がうかがわれる。つまり、ヘロデ王に子供を殺された母親の嘆きをそのかみのラケルの嘆きに擬した「マタイによる福音書」2章, 18節の記述である。ヘロデ、すなわち嬰兒キリストを殺害するためにベツレヘムの二才以下の嬰兒の逆殺を命じたといわれるヘロデに、この七才の幼児を殺した「のろうべきユダヤ人」(cursed Jues) (VII, 599)⁴がなぞらえられ、「現代のヘロデの徒輩」(cursed folk of Herodes al newe) (VII, 574) と慨嘆されているが、罪なき聖嬰兒への強い意識である。語り手自身も何度もこの幼児の死を言葉でもって殉教として

とらえることを躊躇しない (VII, 579, 610, 680)。さらにこの幼児は「ヨハネの黙示録」14章, 3節~5節に歌われている童貞幼児が念頭にあってのことである。幼児の殺害者を「おお, 現代のヘロデの徒輩よ」と慨嘆し, 神の尊厳のかかわるところ殺人は必ずあらわる, と断言してから語り手は「おお, 殉教者よ」と慨嘆し, さあ「一体になって天の白い小羊に従って歌を歌うことができます」(Now maystow syngen, folwynge evere in cou/The white Lamb celestial.) (VII, 580-81), かつて偉大なる福音者ヨハネが詠したように「この小羊の前を歩み新しい歌を歌う者たち」(... they that goon /Biforn this Lamb and syng a song al newe...) (VII, 584) は「いまだ女体を知らない者どもであります」(That nevere, fleshly, wommen they ne knewe) (VII, 584) と発言する。「小羊」とは「黙示録」第14章の 'Agnus' である「新しい歌を歌う」というのは「黙示録」の14万4千人の童貞たちが「新しい歌のたぐいをうたった」(... cantabant quasi canticum novum...) ⁵ ことを想起させるし, 彼等が「いまだ女体を知らない云々」は「黙示録」の「彼らは, 女に触れて身を汚したことの無い者である」(Hi sunt qui cum mulieribus non sunt coinquinati...) から間違いなくインスピレーションを受けたものである。大人の自己抑制をした敢然とした殉教ではなく, まだ何もこの世のことを知らない幼児はまさに「黙示録」の「神と小羊に献げられる初物として, 人々の中から購われた者たち」のひとりであり, 殉教者なのである。日日々星は昇り星は沈む, とアンブロシウス (Ambrosius [333頃-97]) は言う。星が昇ると大地の耕作が始まる。それは「輝く明けの明星」(黙, XXII, 16) であり, 蒔かれるのは穀物の種ではなく, 殉教者の種である。その時ラケルはその子供たちのために泣く。これは彼女の涙によって浄められた子供たちをキリストの代りに献ずることである (ut lacrymis abultos suis, pro Christo offeret infantulos), とアンブロシウスは罪なき聖嬰兒の死を殉教と解釈するが, エグレンティーンによって話されるこの話において, Alma を歌いつづけるように聖母マリアがこの子の舌にのせた

「種」は、アンブロンヌスの言葉をかりるならば「殉教の種」(martyrum seges) であり、⁶ まさにこの作品における涙は 勝利のそれであるとともに幼児殉教者への優しい浄めの涙である。

この幼児の死が殉教であることの意識は、語り手が、話を締めくくるに際して彼の死を今は天国にいるリンカンのヒュー (Hugh of Lyncoln) がユダヤ人によって殺害されたこととくらべていることから察しられる。「ああ、同じくいまわしき (cursed) ユダヤ人に殺害されたる少年リンカンのヒューよ、周知のごとくそれはつがいところのことなれば、何とぞわれらがために祈りたまえ云々」(684-87)。とある。リンカンのヒューというのは、語り手の言うように「つがいところ」ではないが、1255年、ユダヤ人によってわずかに九才で ritual murder として殺された殉教者のことである。Ritual murder とは一種の人身御供である。ユダヤ人がキリスト者の子供をしかるべき儀式のために殺すことである。もちろんそういうことを言いたてるのは偏見による根も葉もない中傷で、13世紀以来教皇によって何度も警告が発せられてきた。⁷ ヒューの場合、証拠なしにユダヤ人が処刑されたし、ヒューはリンカンという地方の教会によって殉教者とみなされてきた。たまたまヘンリ三世の地方巡回のおり、リンカンで直訴があつてこの事件は大仰に喧伝せんでんされイギリス人の心に残ったものである。⁸ それが民間口承されるバラッドに歌いつづけられてきているという事実からも、素朴な哀感をこの事件が喚起しつづけてきたことが分かる。一番有名なのは「ユダヤ人の娘」と題されているバラッドで、ヒューは友達とボール遊びをしていたが蹴ったボールがユダヤ人の家に入ってしまった。なんの疑うことも知らないで、のこのこと誘われるままに家の中に入り、殺され、鉛にまかれて井戸へ放りこまれる。ずいぶんペーソス豊かに歌われている。ヒューの母の取り乱しが感傷を呼ぶ。入相の鐘がなり、一日の営みが終わってもわが子が帰ってこない (他家では子供たちは帰宅しているのに)。たまらずマントを取り出して捜索に出かける母親、いるならヒュー坊や答えておくれ云々。⁹ 母の悲しみという点で

は、チョーサーの場合でも母親は子供の帰りを待ちわびる。

This poure wydwe awaiteth al that nyght
 After hir litel child, but he cam nought ;
 For which, as soone as it was dayes lyght,
 With face pale of drede and bisy thoght,
 She hath at scole and elleswhere hym soght. . . (VII, 586-90)

一夜子供の帰りを待つが戻ってこない。背くなってあれこれ思いめぐらせ、夜が白むや彼女は探しに出かけるのである。そして、

She goes . . .
 To every place where she hath supposed
 By liklihedde hir litel child to fynde. . . (VII, 595-96)

殉教者の幼さは、幼いがゆえに優しい母の嘆きによってその哀れさが増幅される。幼児殉教として有名なものはイギリスでは他に1144年、やはりユダヤによって残酷に殺されたノリッチのウィリアム (William of Norwich) の十二才での殉教があってよく民間に流布していた。殉教者が幼児または少年であることによって悲哀感、悲痛感が増幅される。一般に悲哀感というのは同じく強い情緒的效果をねらっていても悲劇感とは違って人物の受難に關しては受動的である。人物は被害者であり、その受難が共感を呼ぶ。もしその受難が理不尽であり不條理なものであるならより強い情感に揺すぶられる。だから、あどけなさとか無実ということが悲哀感を誘発する人物の必須条件である。戦う力のない弱さ、無力さへの敵意ある力が強ければ強いほどその対照感から劇的に悲哀がたかまる。この無力さ、弱さ、あどけなさということなら子供や少年の不條理な受難が最も効果的であろう。女子修道院長のこの話が一番近い類作Cグループ¹⁰の中で殺害された幼児に該当する人物

Madame Eglentyne は *The Prioress's Tale* の語り手としてふさわしいか 13
がほとんど「男の子」(puer) ですまされているのを、チャーサーはそれに
ことごとく 'litel' 'sely', 'innocent', 'yonge', 'deere' といった形容詞で随所
に修飾しているのも哀感誘引のひとつの手段であろう。¹¹

哀感誘引ということなら、この作品が聖母マリアの奇跡話でもあるという
ことも当然のことながらその理由になっている。語り手の聖母への呼びかけ
が数え切れないほどある。第一、語り手は自分の語る話に聖母マリアのお助
けを呼びかけている (VII, 483f)。そういう呼びかけで重要なものは聖母は
我らの思惑に先だってキリストに我らを導いてくださる、という発言であ
る。

Thou goost biforn of thy benyngnytee,
And getest us the lyght, of thy preyere,
To gyden us unto thy Sone so deere. (VII, 478-80)¹²

これは中世後期のマリア奇跡の本質部分を突いている。12世紀通俗文学にあ
らわれる聖母マリアの奇跡の特徴は他の聖人のそれとは違って、特定の物的
遺物や場所と結びついていないことである。¹³ ために人は個人の心の内部の
問題として聖母に帰依することができる。聖母は遍在におわしてあまねく人
間の心の中を見通しなされる。だから善男善女は奇跡話の人物を我がこととし
て読みこみその人物に容易に自己同化できるのだ。一定の階級や一國に限ら
れることなく、凡そ人とあらばいずこの人であろうが、どこでも誰でも聖母
のお情けを受けることができる。その慈悲をいただく資格はただ帰依、献身
だけ。そしてその奇跡は、マリアの母性のゆえに、弱い者、貧しい者、愛を
受ける資格のない者にもしばしば起る。子供にも、か弱い未亡人にも、墮落
修道僧にも、誓願を捨てた修道女にも、盗人にも、ユダヤ人にさえ注がれる、
ただ日頃の帰依と悔悛があれば。そういう聖母マリアの奇跡話が数知れず語
られ記述され、残っている。そういう弱い人、しかし日頃母の言いつけをま

もりアベ・マリアの祈りを唱え、上級生に Alma を幼児らしくあどけないひたむきさで教授を願い、幼児らしく一途に学校の往復にそれを歌いつづける七才の子（Cグループの類作とくらべるとチャーサーにおける子供が一番年齢が低い）に聖母マリアの慈悲が向けられないはずがあるか。それが罪なき無力な幼児であればあるだけ、マリアの母性が向けられないはずがない。それは聖母マリアの娘、召女としての語り手修道女の「優しさ」（conscience and tendre herte）（I, 150）でもある。そういう意味で、この幼児殉教話、聖母マリア奇跡話は、まこと女子修道院長マダム・エグレンティーンにふさわしい話である。

II

PrT で研究者を悩ませつづけてきた問題がある。それはこの話が巡礼一行の中でも女子修道院長エグレンティーンのする話だ、ということに焦点が集っている。つまり『カンタベリ物語』の「序歌」（*The General Prologue* [以下 *GP* と略]）にそのポートレートが紹介されたあのエグレンティーンのする話としてふさわしいかどうか、ということだ。ふさわしいといえばこれほどふさわしいことはない。修道誓願をたて、心正しきキリストの天の花嫁、いわば聖母マリアの娘、召女として修道生活を送る女性が、聖母の奇跡話を語るわけだから。ところが問題はこの女子修道院長エグレンティーンの語るユダヤ人処刑の様子が余りにも情知らず、残酷であるのはどうしたことか、ということに関心が集中してきた。治安判事は直ちにかけて裁判も行なわず

With torment and with shameful death echon,
 This provost dooth thise Jewes for to sterve
 That of this mordre wiste, and that anon,

Therefore with wilde hors he dide hem drawe,
 And after that he heng hem by the lawe. (VII, 628-34)

とある。拷問にかけて死刑にした。しかもすぐ (that anon) にである。直接の犯人は馬で引きずりまわし絞首刑にする、といったユダヤ人の扱いが、優しかるべき女子修道院長らしくないということである。

この問題は GP で紹介された件の女子修道院長エグレンティーンの性格と関係をもってくる。慎ましく、賛歌もうまく、フランス語の心得もあり、テーブルマナーもよろしく宮廷風になっている。美しく、小動物に優しい。着こなしも隙がなく、珊瑚のロザリオを持ち、それに金のメダイユ、というこの女性は、いろいろ過去、研究者によって取沙汰されてきた。概して、この女性への好意悪意は別として、当時としてははなはだ世俗的雰囲気をつただよわせる当世風な修道女であることが指摘されてきた。こういう見方の草分けとってよいし、そしてそれに尽きるとしてよい研究が今世紀始め J. L. Lowes によってなされている。この女子修道院長は 'the engagingly imperfect submergence of the feminine in the ecclesiastical'¹⁴ だというのである。その澄んだ瞳、かたちのよい鼻、小さい赤い唇、広い額等が宮廷の貴婦人の伝統的描写で、それが修道女に期待される 起居振舞、風貌と微妙に不釣り合いを示すところにアイロニーがある、と Lowes は言うが、¹⁵ 後年の Muriel Bowden や Jill Mann の読みも大同小異この線にそっている。エグレンティーンはその身、墨染の衣をまとう身分でありながら世俗的な虚栄にも女性らしい興味があるらしいし、¹⁶ 修道院の外の世界が気になって仕方がない修道女である。¹⁷ そこには宮廷婦人と修道女の conflation がある。それはチャーサーの彼女への諷刺でもあるのだ。¹⁸

彼女は戒律や規則を何気なく犯しているふしもある。広い美しい額が魅力的だが、これとても、きまりどおりベールを眉の上まで下ろしていれば誇示できないはずである。定期の修道院巡察での司教への報告書にしばしばベールをあげている修道女について、けしからぬ、という報告があるのも現実にそういう修道女がいたということである。¹⁹ エグレンティーンは仔犬を数頭飼っている。同じように巡察の時の報告書に、さる女子修道院長が犬を飼っ

ていて、その犬がいつも彼女の後をぞろぞろと追い、その吠え声がミサの妨げになる、と司教に報告されている事実をみても、²⁰ エグレンティーヌが規則もしくは戒律違反をやっている気配がある。

そもそもエグレンティーヌは心優しい女性で (... so charitable and so pitous [I, 143]; ... al was conscience and tendre herte [I, 150]), ねずみが罾にかかっているのを見ても、また飼犬がぶたれたり死んだりしても、さめざめと泣かれた (wolde wepe [I, 144]; soore wepte [I, 148]) そうである。その優しさが日頃これらの仔犬を「ロースト肉、ミルク、上質の白パン」(rosted flesh, or milk and wastel-breed) (I, 150) で養っていたことにもあらわれている。しかし数世紀にわたって重んぜられたベネディクトゥス (Benedictus [480頃-543]) の修道院戒律では肉食は禁止であったはずだ。²¹ また 'wastel-breed' は15世紀のロンドン市庁の記録『恵まれた生活』(Liber Albus) によると、*demeine* と呼ばれる最高級のパンの次にランクされる上質の小麦パンで、²² それ以下に小麦とライ麦の混合パン、大麦パン、ライ麦パン、からす麦パン、さらにはそら豆、えんどん豆、糠などを交ぜた砂のようなパンまであったというから、²³ ずいぶんと上質のパンを仔犬の餌にしていたわけである。エグレンティーヌ自身も常食にしたものであろう (彼女自身は粗食をくらい、犬にだけ馳走していたとも思われぬ)。ベネディクトゥスの戒律の、IV, 12の「亭楽に愛着をもつな」(delicias non amplecti) の違反だと言われても仕方がない。これほどの小動物への日頃の優しい心、そしてそういう動物が折檻された時の憐れみの涙、これが彼女の 'conscience' (I, 142. 150)²⁴ なのである。たしかにベネディクトゥスの戒律に「愛の心を忘るな」(caritatem non derelinquere)²⁵ とあるがその実践のつもりかもしれないし、修道の祖、聖フランチェスコ (Fransesco [1181-1226]) の小動物や花々への愛を真似ているのかもしれないが、聖トマス (Thomas Aquinas [1225-74]) も言うように、そもそも「友愛 (amicitia) は理性的被造物 (rationales creaturas) に対してしか持たれないものなのである。それはこうした被造

物においてこそ愛しかえすということや生の諸々の活動を共にするということが可能」であるからだ。²⁶ エグレンティーンの子犬やねずみに対する優しい関心は一見他者の苦しみに対する共感のようにみえても、それは現実には「生の諸々の活動を共に」している隣人の苦しみ、というより動物、非理性的被造物 (*Creaturæ... irrationales*) に向けられている。彼女のロザリオに下がっているメダイユに彫られている「愛はすべてを征服する」(*Amor vincit omnia*) というモットーも、その「愛」(*amor*) が、もともと世俗の愛を指すにしろ、また当時は聖なる愛を指示するように用いられていたにしても、²⁷ その内容が極めて曖昧で、皮肉で、真の隣人への共感的愛 (*miseri-cordia*) のパロディとしてある、²⁸ ということも首肯できる。こうして、そもそも彼女の愛の精神がまがいもののものであるなら、彼女の「優しい心」の発揮も語るに落ちるで、そのユダヤ人への酷薄な姿勢は本来の偏見に発する醜い心の仕組みで、彼女はこういう話をするのにふさわしいとも言えるのである。

それにしても、たといまががいもの愛であっても小動物に涙することのできる心根が、世に仇なす者に対してであってもその残酷な拷問を平然と描写しうるということへの異和感が残る。世俗的な傾向を示してはいるが、ねずみの死に涙する女子修道院長には殺戮と拷問の話はふさわしからず、官廷風の物語こそよけれ、とする Kemp Malone²⁹ や、彼女の幾分ねじれた (*warped*) 性格を指摘し、チャーサーの彼女へ向ける寛容さを指摘しながらも、修道誓願をたてた修道女の信心と対ユダヤ人感情にみられる非寛容の偏狭な信仰 (*bigotry*) との不釣り合いを指摘せざるをえなかった R. J. Schoeck,³⁰ 彼女のきびしさは彼女の優しい心と相容れないとする E. T. Donaldson³¹ など、どこかでそういう不自然さに気がついていたのである。Muriel Bowden に至ってはむしろ彼女のまがいもの優しさの不自然さが、ユダヤ人に科される拷問をまったく平然として描く事実によって確認されたときえ発言する。³² むしろそれを敷衍すれば、こういうエグレンティーンにこういう話はふさわ

しいとさえ言える。

ひるがえって GP のエグレンティーンを百パーセント弁護する Sister M. Madeleva 立場（ベネディクトゥスの戒律に逐一照しても彼女の起居振舞、衣服を修道院生活にかなったものだとする）³³ にたっても、なおさら彼女の残酷なユダヤ人処刑の描写は修道女にふさわしくないことになる。³⁴ それに Madeleva はこの女子修道院長の話す幼児殺害の物語を論ずるに際しても反ユダヤ人感情には言及していないから、エグレンティーンの残酷さには関心を示していないことになる。

こうして解釈は堂々めぐりをする。集約するところ、ねずみの死にも涙するエグレンティーンには殺戮の話はふさわしくないという Kemp Malone の発言、すなわち

...this tenderheartedness of hers does not go well with the story of a murder, much less the murder of an innocent child. A woman who weeps at the sight of a dead mouse is hardly the right person to tell a tale of throat-cutting and torture.³⁵

のところで堂堂巡りをしているのである。たかがねずみや仔犬の死に涙するのが本来の 'conscience' であるのか。また庶民といえども人間さえ簡単に口にできない餌で仔犬どもを養っているのは女性本来の 'conscience' であろうか、という問いかけの整合性はあるにしても、その彼女もおそらく船上で打物としての激戦で優位にたつと敵を海路それぞれの故郷に送ってやった（つまり海に切って捨てた）というカンタベリ巡礼一行の船乗り（Shipman）の 'conscience' の無さ（of nyce conscience took he no keep. [I, 398]）には悲鳴をあげたであろう。³⁶ それが自然の情の動きだ。たしかにそれは世俗の女性の自然の心かもしれない。そういう目前の残酷さに悲鳴をあげる女性の感傷的な心の動きであろう。H. L. Frank も言うように女性特有の 'whimsical, capricious, emotional, irrational, unconventional'³⁷ なものである

Madame Eglentyne は *The Prioress's Tale* の語り手としてふさわしいか 19
とも言える。

III

そもそもこの話はその anti-semitism のゆえに特にことあげさるべきものではないのである。14世紀のイギリス人のユダヤ人への反感は同時代の神学的解釈や現実生活のユダヤ人の起居振舞を認識したうえでの根拠あつてのことではない。(第一ユダヤ人の ritual murder の習慣は13世紀にすでに述べたように再度教皇によって否定されているし、1290年にすでにエドワード一世がユダヤ人を国外追放したのは周知の事実である)。エグレンティーンやその背後にいるチャーサーも、集団としてのユダヤ人を日常生活で認識しているわけではない。ユダヤ人が子供を殺すという俗信は現実の経験ではないはずだ。反ユダヤ人感情は宗教的偏見、誤解にもとづくものだろうし、外の世界からやってきたものをまるで鬼や悪魔のように忌避する民衆的感情であろう。迷信にどっぷりついていた時代の人々の意識の中にある恐怖の情が客観化されてユダヤ人に託されたものであろう。⁹⁸それはこの作品の類作群(もっと後年の)のユダヤ人の扱いを見ても分かるし、聖史劇にもしばしばサディスティックなまでキリストをいじめるユダヤ人が平然と描かれていることから見てもうなずける。中世劇におけるこれらのユダヤ人は決して現実のユダヤ人ではなく非個性化されたポートレートである。非個性化されているということは一般化されているということ。一般人の一般的な俗信的恐怖が、ユダヤ人一般を忌避することによって除去されるのである。⁹⁹そういう一般的なユダヤ人観をふまえているがゆえにこそ、この話におけるユダヤ人の処刑のむごたらしさもひとつの型として定着しているということで、特に取りたててエグレンティーンの残酷さのあらわれというわけでもない。

12世紀のウエイルズの修道僧モンマウスのトマス(Thomas of Monmouth)による殉教少年ノリッチのウィリアム伝によると、この1144年の ritual murder にかかわったユダヤ人の処刑を次のように話している。

Since then it is certain... that the most blessed boy and martyr William was slain by the Jews, we believe that it was brought about by the righteous judgement of God that these same men, being guilty of so horrible a crime, suffered so prompt a retribution for such deliberate wickedness, and that the rod of heaven in a brief space of time exterminated or scattered them all.⁴⁰

PrT においてもこの幼児殺害にかかわったユダヤ人が死刑になった。しかもすぐ (and that anon) (VII, 630) とあるのも特に怪しむにたらない。リンカンのヒューの場合も、この事件のもっともポピュラーな文献マシュー・パリシ (Matthew Paris [1200頃-59]) の『イギリス年代記』(*Historia Anglorum*) に首謀者の一人のユダヤ人 Copin の処刑を「馬の尻尾に縛りつけられ、処刑場まで引きずっていかれた」と記しており、⁴¹ またこの事件を扱ったほぼ同時代の『バートン地方年代記』(*Annales de Burton*) にも Jopin という首謀者が馬の尻尾にくくりつけられ、挙句のはて絞首されたという記述があるし、⁴² さらに事件と同時代にアングロ・フレンチ語が書かれたバラッドにも、犯人は息の絶えるまで町中馬に引きずられ、そのうえで絞首された、という件りがある。⁴³ こういうことをふまえていると、“Therefore with wilde hors he dide hem drawe, / And after that he heng hem by the lawe” (633-34) という *PrT* のユダヤ人処刑の記述も特にショッキングでもない。ユダヤ人記述のひとつのパターンに従ったまでである。

この作品の本質はそういう anti-semitism にあるのではない。女子修道院長エグレンティーンは最後にこの幼児の痛ましい死を殉教少年リンカンのヒューの死に擬して、わたしたちもこの子に天国で逢えますように、と祈るが、それはこの話を殉教話と見たてている姿勢である。それはこの幼児を「黙示録」の14万4千人の天の小羊のお伴をする童貞 (virgines) のひとりに見たてる姿勢からも了解できる。エグレンティーンが引き合いに出すヒューの殉教の次第には聖母マリアのご介入はないが、このエグレンティーンの話は、

もし聖母マリアの優しいご介入のエピソードがなければ、作品として意味がないのである。日頃聖母マリアに帰依さえしておれば聖母はいつ、誰にでも応答される、いや祈りに先んじて慈悲をお示しくださる。そしておよそ人間的限界の世界を超越した勝利を無辜なるものにお与えくださる。もしこの作品に *morality* ありとせば、まさしくこの事実を *exempla* として我らのエグレンティーンは修道女としての公的な召命のままに巡礼衆一同に伝えたのである。いささか世俗のしみに染っているとはいえ、それは聖職者としての公的な声である。ただ小動物の死や折檻にも涙する優しさ、気紛れで理になかったものではないかもしれないが、まさに女性としての優しさが幼児の死に涙することになったのである。したがってその幼児の死が痛ましく健気なものであるという効果が必要である。この子が無邪気で、一途で、かわいいということが優しい涙の誘発の要件である。チャーサーはそのように幼児を描いた。さればこそ聖母マリアもこの子の祈りに先んじて慈悲の手をさしのべられた。それは GP に描かれた聖にもつけず、俗にもつけないエグレンティーンの欲求願望である。彼女のその欲求願望が聖母マリアによって代りに実行されたのである。幼児の母の嘆きをラケルの嘆きになぞらえたのは、彼女が幼児の母をラケルを通して、同じく嘆きの母である聖母に重ねることによって聖母の慈愛を引き出したのである。幼児の殉教を、当時の俗信どうりユダヤ人の暴逆による涙そるものとすることによって聖母のお情けを誘い出した。ユダヤ人はその効果のための *foil* 役にすぎない。

チャーサーは幼児殉教話一般のもっている痛ましさという情緒的效果を存分に利用して、また自らもその情緒的效果を意図的にたかめて、それを人口に膾炙している聖母マリアの奇跡話に織りこみ、聖母崇敬のテーマを *morality* として出した。数ある類作の中でも、子供が生きかえるという奇跡話の類作系列に範を取らず、子供の死という悲痛さをもつ類作系列にその典拠を選んだ理由もそこにあるのかもしれない。

いずれにしてもこの作品は感傷性のたかい殉教話を素材にした聖母マリア

奇跡話である。そしてその感傷性がマリア奇跡話の生命であり、語り手の性格をよく物語っている。そしてそれはまたこの時代の好尚にぴったりあっている。すでに述べたように、14, 5世紀になって教会は単に信徒の教化を教條的指針にたよるのではなく、憐憫、歡喜、恐怖、希望といった強い感情喚起に依存するようになってきた。時禱書にそえられる絵画、説教、抒情詩、聖史劇等にその傾向がみられる。こうした傾向の背後にはキリストに人間性を与えようという時代の現象がある。理性よりもハートが優先する。認識は經驗的、特殊的で、感覚によって事象を把握する。冷たい抽象性の強い教訓によってではなく、感覚世界の指示によって直接反応を要求する時代であった。⁴⁴ 受難を、奇跡を目の当りに見るという 'experience' が四角四面な、ともすれば融通性を欠く 'auctoritee' にとって代りかけた時代であろうか。そうなるこの *PrT* もチョーサーという天才によって生み出された時代の子でもある。

註

- 1 *The Canterbury Tales* からの引用は L. D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton, Mifflin, 1987) によった。また聖書からの邦文引用は、新共同訳『聖書』(「日本聖書協会」1987) によった。
- 2 待降節から聖母お潔めの祝日(2月2日)まで歌われる典礼交誦のひとつ。全文は、邦訳では「救い主の聖なるおん母、天の通路よ。あなたは変ることのない門、海の星。助けたまえ倒れても、まだ起きあがろうとする民を云々」。(『処女聖母マリアの小聖務日課』増補第二版、光明社、1965)。
- 3 参考までに M. E. D. の与える 'innocent' (n) の語義を挙げておく。(a) A sinless person, guiltless person; (b) a harmless person, inoffensive person, someone not an enemy; (c) a quileless person, unsuspecting person; a naive, simple, or foolish person; (d) ?an inexperienced person, tyro; (e) a young child; esp. one of the Holy Innocents; (f) coll.: the innocent.
- 4 この 'cursed' は *PrT* では5度使用され(570, 574, 578, 599, 685), そのうち三つはユダヤ人に、ひとつはヘロデに、残りのひとつはカインへの形容詞として使われている。

- 5 ラテン語聖書の引用は *Biblia Sacra juxta Vulgatam Clementinam* (Paris : Desclée, 1927) によった。
- 6 Saint Ambrose, *Letters* 1-91, trans. Sister M.M. Beyenka ("The Fathers of the Church," vol. 26, Washington, D. C. : The Catholic University of America, 1954), p. 269 ; Migne, J.-P., *Patrologiae cursus completus*, Series latina 16 (Paris, 1845), p. 1139.
- 7 Cf. "Ritual Murder," *The Catholic Encyclopaedic Dictionary*, ed. by Donald Attwater, 2nd ed. (London: Cassell, 1949).
- 8 G. I. Langmuir, "The Knight's Tale of Young Hugh of Lincoln," *Speculum*, xlvii (1972), 459, 461.
- 9 F. J. Child (ed.), *The English and Scottish Populr Ballads*, vol III (Boston : Houghton, Mifflin, 1888), pp. 243-44.
- 10 Carleton Brown の調査では *PrT* の類作は33あり、それがA, B, Cのグループに分けられる。*PrT* はCグループに属する (W. F. Bryan and Germaine Dempster [eds.], *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* [London: Routledge and Kegan Paul, 1941], pp. 447-85.
- 11 VII, 503, 509, 512, 517, 538, 566, 587, 593, 596, 643, 646, 667.
- 12 同趣旨の発言は「第二の修道女の話」(*The Second Nun's Tale*), (VII, 40-56) にもあるが、その典拠はダンテの *Paradiso*, xxxiii, 16-21である。
- 13 Cf. Benedicta Ward, *Miracles and the Medieval Mind* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1982), pp. 164-65.
- 14 J. L. Lowes, *Convention and Revolt in Poetry* (London : Constable, 1910), p. 60.
- 15 J. L. Lowes, "Simple and Coy," *Anglia*, xxxiii (1910), 440.
- 16 Muriel Bowden, *A Commentary on the General Prologue to the Canterbury Tales* (New York: The Macmillan, 1954), p. 98.
- 17 *Ibid.*
- 18 Jill Mann, *Chaucer and Medieval Estate Satire* (Cambridge: At the University Press, 1973), pp. 129, 137.
- 19 G. S. Daichman, *Wayward Nuns in Medieval Literature* (New York : Syracuse University Press, 1986), p. 153.
- 20 *Ibid.*, p. 28.
- 21 その39章に「四つ足の動物」(carnium quadrupedem) を食することをひかえよ、とある。(*The Pule of St. Benedict : The Abingdon Copy*, ed. from Cambridge, Corpus Christi College MS. 57 by John Chamberlin [¹Toronto Medieval Latin

- Texts"; Toronto: Pontifical Institute of Medieval Studies, 1982], p. 49).
- 22 Bowden, *A Commentary*, p. 99.
- 23 B. A. Henish, *Fast and Feast: Food in Medieval Society* (University Park: The Pennsylvania University Press, 1976), p. 155.
- 24 この 'conscience' はチョーサー自身が 'tendre herte' と言い直しているので M.E.D の与える 'tenderness of conscience, solicitude, anxiety' (4) の意味であろうが、女子修道院長の性格描写はアイロニーに満ちたものであるので 'The faculty of knowing what is right, esp. with reference to Christian ethics; the moral sense, one's conscience; awareness of right and wrong; consciousness of having done something good or bad.' (M. E. D, 2[a]) の意味も当然寄り添っているだろう。
- 25 *The Rule of St. Benedict*, IV, 26.
- 26 『神学大全』 第2冊, Qu. 20 art. 2, 高田三郎訳, 創文社, p. 201.
- 27 Cf. L. D. Benson, *The Riverside Chaucer*, p. 805.
- 28 J. M. Steadman, "The Prioress' Dogs and Benedictine Discipline," *MP*, liv (1956), 1, 5.
- 29 Kemp Malouf, *Chapters on Chaucer* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1951) pp. 218-19.
- 30 R. J. Schoeck, "Chaucer's Prioress: Mercy and Tender Heart," *Chaucer Criticism*, ed. by R. J. Schoeck and Jerome Taylor (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1960), pp. 249, 253.
- 31 E. T. Donaldson (ed.), *Chaucer's Poetry* (New York: Ronald Press, 1958) p. 933.
- 32 Bowden, *A Commentary*, pp. 99-100.
- 33 Sister M. Madelvea, *Chaucer's Nuns and other Essays* (1925; reissued, Port Washington: Kennikat Press, 1965), pp. 3-41
- 34 エグレティーンの外見、衣裳、振舞の諸特徴を伝統的なマリア描写の意識的模倣で、必ずしもその世俗性の証拠とならないとする H. L. Frank の立場もあるが ("Chaucer's Prioress and the Blesset Virgin," *ChR*, vol. 13 [1979], no. 4, 359), その場合は彼女の修道女としての召命による公的な立場が反ユダヤ人感情の表白であることを弁護することになる。
- 35 Malouf, *Chapters*, p. 218.
- 36 因みに『カンタベリー物語』第7断片でこの *PrT* に直接先だつ話は「船乗りの話」(*The Shipman's Tale*) であり、この女子修道院長と船乗りのする話を退縮させることによって *GP* における船乗りの考える 'conscience' と女子修道院長の 'conscience' と

の比較をチャウサーは意識したとも言えよう。

- 37 H. L. Frank, *op. cit.*, p. 359.
- 38 だからユダヤ人といえば 'false' であるし, 'caytyves accorsed for evere' であり, 'Cursed caytyves' と相場が決っていたわけである (William Langland, *The Vision of Piers Plowman: A Complete Edition of the B-Text*, ed. by A. V. C. Schmidt (London: J. M. Dent, 1978), XVIII, ll. 92, 93, 96.
- 39 Stephen Spector, "Anti-Semitism and the English Mystery Plays," *The Drama of the Middle Ages*, ed. by Clifford Davidson and others (1934; rept, New York: AMS Press, 1982) pp. 330, 338.
- 40 Thomas of Monmouth, *The Life and Miracles of St. William of Norwich*, ed. and trans. A. Jessopp and M. R. James, 2, 13, p. 97. (Benedicta Ward, *Miracles and the Medieval Mind*, p. 68 より引用)。
- 41 Matthew Paris, *English History*, vol. III, trans. J. A. Giles (1854; rept. New York: AMS Press, 1968) p. 140.
- 42 Child, *The English and Scottish Popular Ballads*, vol. III, p. 237.
- 43 *Ibid.*, p. 239.
- 44 R. W. Frank Jr., "The *Canterbury Tales* III: Pathos," *The Cambridge Chaucer Companion*, ed. Piero Boitani and Jill Mann (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), pp. 144-45; C. P. Collette, "Sense and Sensibility in the *Prioress's Tale*," *ChR*, vol. 15 (1980), no. 2, 139-42.

Synopsis

Is the *Prioress's Tale* Adapted to Its Teller?

Isamu Saito

The *Prioress's Tale* is a story replete with tender sentiment. A 'litle clergeon,' a seven-year-old boy, singing an antiphon "Alma redemptoris mater" to and from school, offends the Jews and is killed by them. His body is cast into a 'privy.' But he never ceases from singing "Alma." The Blessed Virgin put a miraculous 'greyn' on his tongue and gently ordered him to continue singing. When the 'greyn' is taken away his soul ascends to Heaven leaving tear-stained people behind.

The teller, Madame Eglentyne, a prioress, is strongly conscious of the child-martyr, for in her prologue to the Tale she utters a prayer, which is apparently paraphrased and adopted from the opening verse of the antiphon of The Feast of the Holy Innocents. The teller compares the 'cursed Jews' who killed the boy to Herod who ordered the murder of all the children in Bethlehem—children later sanctified as the holy infants (or innocents), in honour of whom the mass is held. Moreover, the sorrow of the boy's mother is told in terms of the sorrow of Rachel who weeps for her dead children (Matthew, II, 8). The mother's sorrow serves to amplify the patheticism of the boy's death. Eglentyne expects that the murdered boy will also join the 144,000 pure, blameless and spiritually undefiled virgins who follow the Lamb in *Revelation*. Eglentyne's concern about the child-martyr is

illustrated once more in her last prayer in which she alludes to the pathetic story of Hugh of Lincoln, a Christian boy murdered in 1255 by the Jews. The boy was listed among the martyred saints, and his story has been preserved in the ballad.

The Miracle of the Virgin is also the central topic of the Tale. Adoration of the Virgin became popular among people from 12th century, because unlike the case of other saints, her benevolent protection is not particularly related to specific relics and places. Mary could be evoked anywhere and by anyone. Only devotion to her was believed to be the means to salvation. The miracles were performed especially on behalf of the poor, the weaker, and the undeserving. The 'litel clergeon,' whose eager Marian worship is innocent, is the most suitable object of protection by the Virgin. The teller, Eglentyne the nun, the virgin bride of Christ, the daughter and the handmaid of the Virgin has a claim to tell the story of the death of an innocent Christian boy who is fetched to Heaven through the warm maternity of 'Cristes moder.'

The question arises, however, as to whether or not the Tale is adapted to its teller. The character of the teller Eglentyne and her anti-semitism has been the cause of hot discussion. Is such a dubious woman as Eglentyne characterized in the *General Prologue* a right person to tell the pious tale? Is it not unbecoming that the prioress, or the handmaid of the merciful Virgin should be so unmerciful as to describe unscrupulously the scene of the execution of the Jews?

Though very attractive in her manners and appearance, Eglentyne as a nun seems to be worldly, being interested in secular courtly manners. Her 'conscience' or 'tendre herte' is turned to her pets,

which were forbidden to be kept in the priory by the Rule of Benedict. For such a worldly nun the pious story is unfitting. No one will oppose affectionate tears for the death of little animals, but Eglentyne, if she is to observe God's love, should not turn her love to a 'non-rational creature with the love of desire,' as St. Thomas admonished. Her 'conscience' seems to be a mere sham. However, if she were by chance to witness the fighting scene where her fellow-pilgrim Shipman, with no 'conscience,' cruelly killed his enemy, she would fall into a swoon with a shock. Her 'conscience' is a sort of feminine sentimentality. In this respect her weeping for the dead boy is understandable.

The problem, however, remains unsolved. Why should the feeling of such a woman of sentimentality be untouched with cruelty of the execution of the Jews? The Jews were executed with 'torment' and 'shameful death' and 'that anon.' With a wild horse they are drawn and hanged. Eglentyne has been condemned by critics for her religious prejudice. But the primary purpose of the Tale is not the illustration of anti-semitism. The cruelty of the punishment of the Jews was a stereotype and does not purposely indicate the teller's cruelty. The murderer of William of Norwich, a child-martyr, as Thomas of Monmouth describes, "suffered so prompt a retribution." Matthew Paris did not hesitate to describe the execution of the murderer of Hugh of Lincoln as "he was tied to a horse's tail and dragged to the gallows." The Jew, according to *Annales de Burton*, was "tied to the tail of a horse, dragged a long way the streets... and hanged." We shall notice a parallelism between the description of the Jew in the *Prioress's Tale* and those in other legends. Eglentyne (and Chaucer behind her)

only conformed to the custom of describing the Jew as a stereotype, denoting spiritual rather than social evil. The Jew is the dehumanized force of Evil, the agency of threat, an alien element in the community.

Eglentyne's love may conquer all, but it is love of a particular sort, not the light of charity, narrowly directed at wounded or beaten pets or the murdered child. Hence the Tale's sentimentality. Eglentyne is a dubious nun and her nunlike ambivalent wish-fulfillment is satisfied vicariously by the Virgin. She has indulged her womanish emotion and at the same time followed her vocation as a nun by telling the story of a child-martyr and the miracle of the Virgin.

Pathos in the Tale is dependent on the taste of the time and Chaucer was unusually receptive to it. The Church, for the edification of people, tended to depend upon the experiential, the particular, that which one could comprehend through the sense. The sensible world (the world of 'experience') and an immediate response to it, rather than any abstract philosophy (the world of 'auctoritee') formed the basis of people's (and Eglentyne's) faith. Eglentyne succeeded in putting deep human and feminine emotions into the Tale.